# 「想い出」のかさなり

1180050　上本 真衣
指導教員 ： 吉田 晋
高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

## １．はじめに

「 ばあちゃんの家を新しく設計してほしい 」
父の何気ない一言からこの設計は始まった。

平成２８年１０月２１日、私の実家のある鳥取県倉吉市で震度６弱の大きな地震がおこった。家族はみんな無事で、おばあちゃんの家も私の実家もなんとか無事だった。地震から２か月後、高知にいた私は実家に帰った。町中のあらゆる家の屋根はブルーシートで覆われ、地震の名残があちこちで見受けられた。おばあちゃんの家は昭和４９年に建てられており、日常生活に支障は出ていないが、基礎の部分を含めこの地震でだいぶダメージを受けたようだった。そして私はこの時の帰省で、父のこんな言葉を耳にした。「 次、また今回みたいな地震が来たら、ばあちゃんの家は崩れちゃうだろうな。だけん、ばあちゃんの家を新しく設計してあげてや。」私は、「 わかった。まかせてや。」と返事をした。冗談交じりのこの会話をきっかけに、私は、おばあちゃんの家を新しく設計することを決心した。

## ２．設計に込める想い

今まで過ごしてきた家を新しく設計する前に、まず私は、押入れから昔の写真の束を取り出し、机に広げて、みんなでざっくばらんに話しながら、これまで家族で共有してきた時間や空間を、思い返すことから始めた。

### ２-（１）設計のカギとなるモノ

以前、今のおばあちゃんの家には、家族みんなで住んでいた。その時から、何かお祝い事をするときや特別な日には、仏間に大きなテーブルを出して、時には手作りの飾りをあちこちに飾って、みんな揃って料理を囲むという、私たち家族の風習があった。（写真１）そして、私が小学校に入学するころ、同じ敷地の中にもう１つ新しい家を建て、そこに父、母、姉、私の４人で暮らすようになった。おばあちゃんの家と同じ敷地にあることから、それからもその風習は当たり前のように続いていった。しかし、おばあちゃんの家の仏間は、キッチンやダイニング、リビングと離れているため、今となっては、仏間で料理を囲むことが少なくなってきている。そこで、未来の家では普段から仏間と同じ空間で食卓を囲めるようにしたいと考えた。そして姉の子どもたちも一緒に暮らす今、新たな「想い出」もたくさん生まれる。このような「 新しい生活を送る中でどんどん消えていってしまうであろうたくさんの「想い出」が、世代を超えてまでも、普段の何気ない生活の中でよみがえる 」そんな家を設計することに決めた。

写真１.　仏間で誕生日会をしている様子

### 2-（2）「想い出」とは

「想い出」とは、いつかの何気ない日常や、いつもとは違う感覚を得た経験が、ふとした瞬間に特別なモノとして、心の中、頭の中に現れることなのではないかと、私は考える。

決して消えることはなく、時と時とを飛び交い、何かと重なり合った時に姿を現し、時には人と人とを、時には時間と時間とを結んでくれる、私にとって、不思議で、大切なモノである。

## 3．　設 計 内 容

「想い出」をキーワードに、過去や今の暮らしと未来の暮らしとを重ね合わせ、懐かしさと新鮮さとを交えた未来のおばあちゃんの家の実現に向けて設計を始めた。

### 3-（1）「想い出」を再生する

＜ 仏間のある生活 ＞

前にも記したが、私の家族にとって仏間という空間は、特別な日になると家族みんなが集まって食事をする、ダイニングへと変化する。しかし、今は、それがだんだんと減ってきている。小さいころからこの風習が当たり前で、私はこの時間がとても好きだった。そこで、今回の設計では、仏間を普段の生活に溶け込ませ、毎日、昔のようにみんなで特別な日を過ごすような感覚でい続けられる間取りとした。（図１）

### 3-（2）「想い出」を受け継ぐ

＜ みんなで庭をつくり、あそぶ ＞

私のおばあちゃんはガーデニングが好きで、毎日のように庭で水やりや花壇の手入れをしている。父は庭づくりが好きで、タイルやコンクリートを一から自分ではったりしている。私は小さいころから、それを一緒に手伝ったり、よく庭で遊んだりしていた。今では、姉の子どもたちもガーデニングの手伝いをしている微笑ましい光景を、実家に帰った時によく見る。そこで、未来の家の庭でもこのような光景が続いていくことを願って、生活空間と庭との距離や関係性がより近づく設計をすることとした。（図２）

図１．　仏間とダイニングでの「想い出」の変化

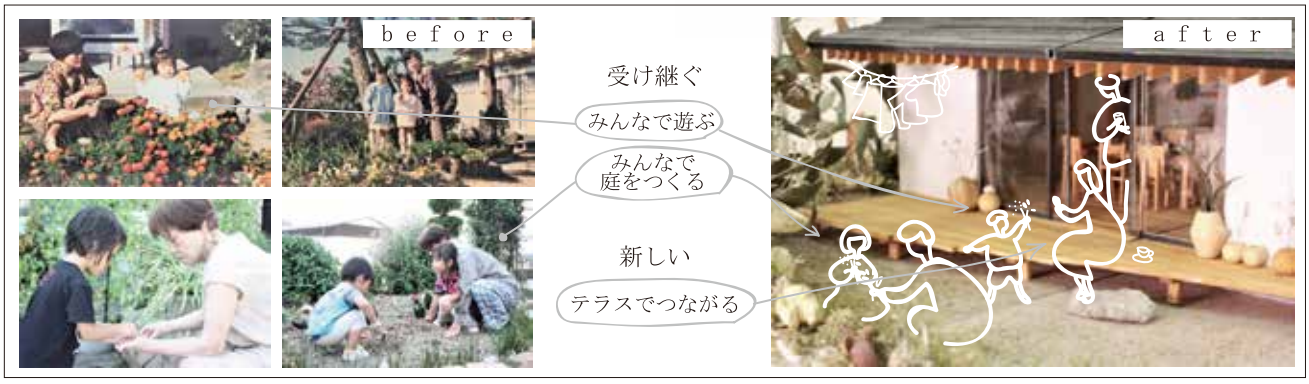



図２．　庭での「想い出」の変化

＜ 友だちが集うリビング・ダイニング ＞

おばあちゃんには仲良しな人たちがたくさんいて、昔からいつも、いろいろな人を家に招いている。私たち姉妹が小さいころから、毎日のように家に来てくれる、近所のおっちゃんとおばちゃんがいる。家に来るやいなや、珈琲を淹れ、お菓子をつまみ、何気ない会話が弾み始める。そして時には、５～６人の近所のおばちゃんたちが集まって、みんなそろって手芸をし始める。手芸は、おばあちゃんの趣味のひとつで、家には山ほどの手芸用品であふれている。家の壁と棚は、おばあちゃんの作品で色とりどりに着飾られている。私たち姉妹も小さいころからその中に混ざって遊んでいた。この習慣や仲をこれからもずっと続けていけるよう、この空間をほとんどそのまま、未来の家に残すことにした。（図３）

### ３-（３）「想い出」を新たにする

＜ あらゆる棚にあらゆるモノをかざる ＞

私が小さいころは、お祝い事の際にもらったプレゼントをしばらくの間、床の間に飾っておくという風習があった。また、ひな壇やクリスマスツリーも床の間に飾っていた。今思い返すと、この床の間の使い方は私たち家族独特のモノだと気付いた。そこで、未来の家の床の間は、飾るという要素を強め、床の間部分の壁一面に棚を設けることにした。また、モノの多い生活を送る私たち家族にとって、飾る空間というのはとても重要であると感じたため、あらゆるところに棚を設け、家中をギャラリーにした。（図４）

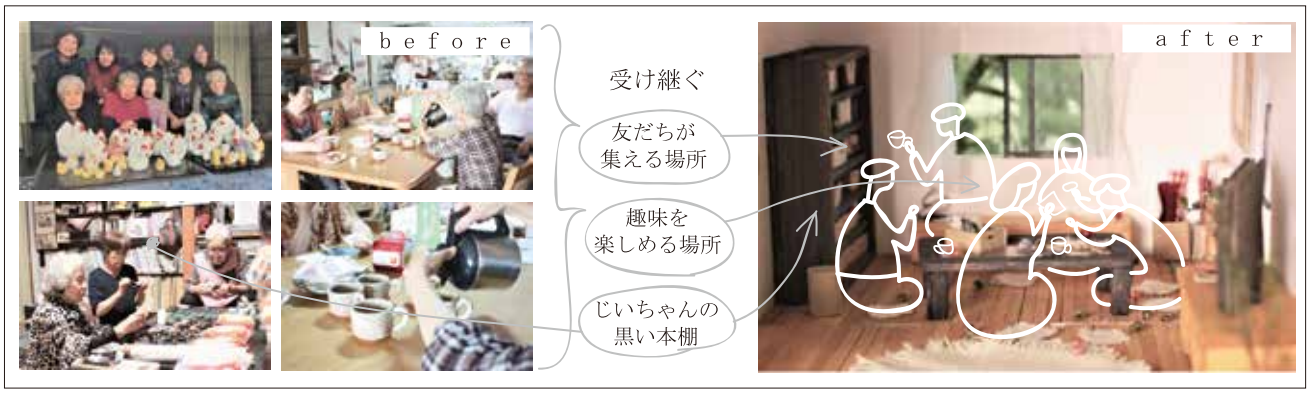



図３．　リビングとダイニングでの「想い出」の変化

図４．　床の間の「想い出」の変化

### 3-（4）「想い出」を未来の家にふきこむ

（1）～（4）を実際に図面へと描いた。間取りは全く違うように見えるが、過去、今、未来の空間利用をタイムスリップさせながら設計を行うことで、「想い出」のかさなりを生み出した。（図面１）

## 4．住まいづくりにおける思想

住まいという空間は、そこで暮らす人や家族にとって大切な居場所であり、様々な瞬間、時間、また特別な習慣を創り出す。そして、時間が経つとそれらは「想い出」へと変化する。

時間の行き来によって生まれるいくつもの「想い出」のかさなりが、人々の暮らしを創り出す。

住まいという、個人や家族の暮らしにいちばん寄り添うことのできる建築・空間だからこそ、その人、その家族にとっての特別な「想い出」をかさね続けられることが、住まいづくりにおいて一番価値があるのではないかと、私は考える。

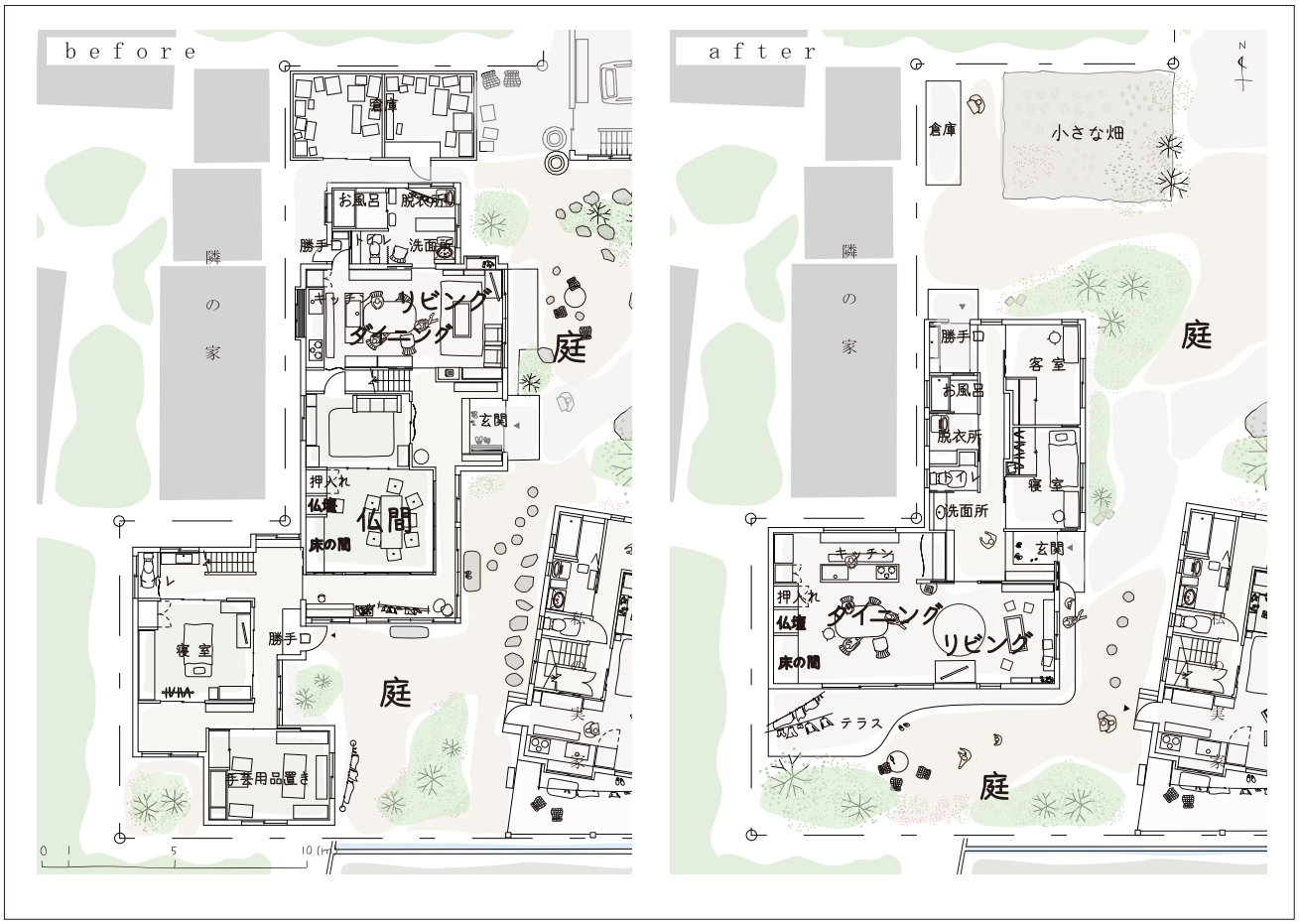
## 5．まとめ

父の一言から始まったこの設計は、私たち家族みんなの「想い出」が何層にもかさなり、生み出されたものである。

未来の家において、「想い出」を再生することで懐かしい感覚が生まれ、受け継ぐことでいつもの感覚が継続し、新たにすることでこれから創り出されるモノへの新しい感覚が芽生える。未来での生活のかさなりがこれらの感覚を生み、私たちにしかない生活感をも生み出すことができるのではないかと考えている。

もしかしたら、この考えや感覚が、とある人や家族の住まいづくりにおいても、とても大事なモノと成りえるのかもしれない。

今回の設計をきっかけに、家族と過ごす時間の大切さや温もりを心の底から感じることができた。私はこの感覚をたくさんの家族に届けていきたい。




図面１．　おばあちゃんの家の今と未来の平面図